



特255

83

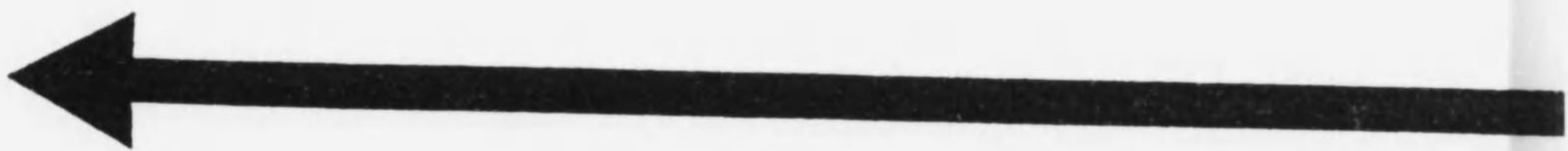
演第二輯)

名古屋市を中心とする史蹟に就いて

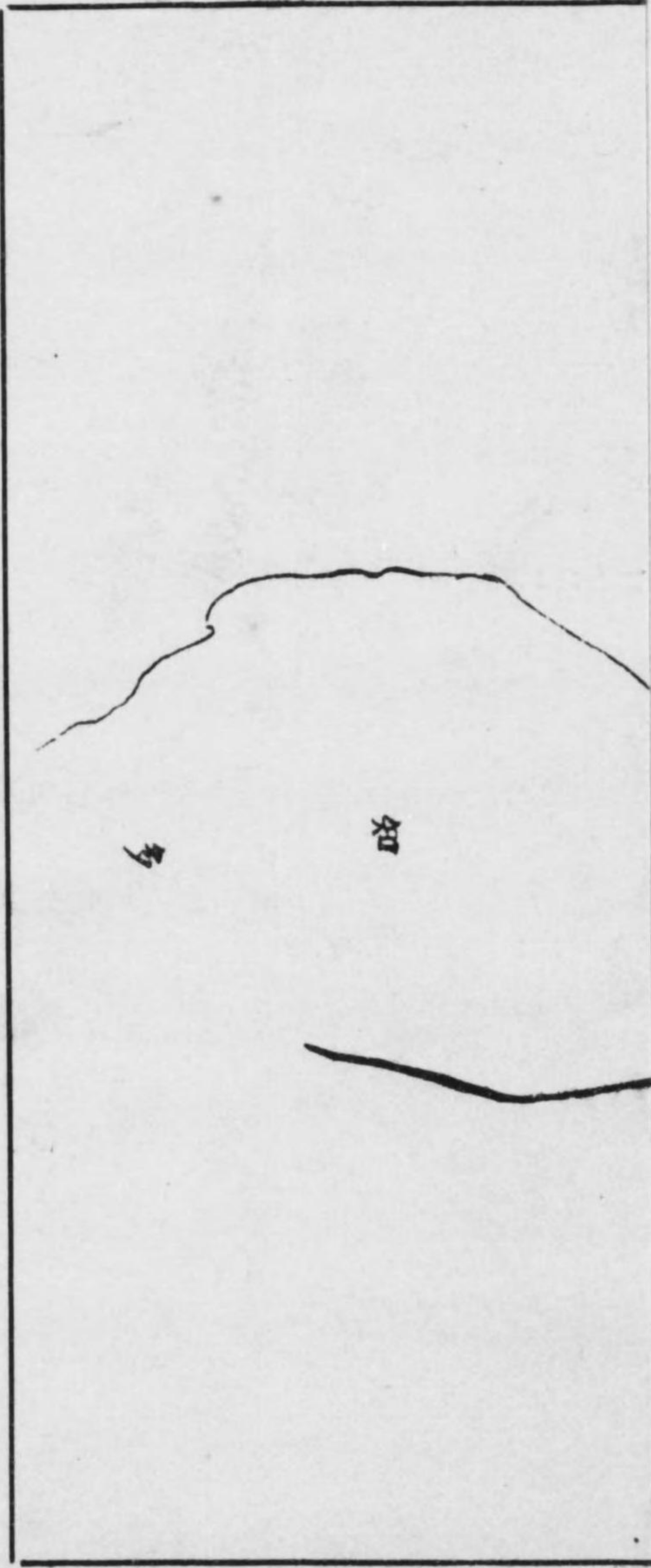
岡崎市立図書館長 柴田顯正先生講演

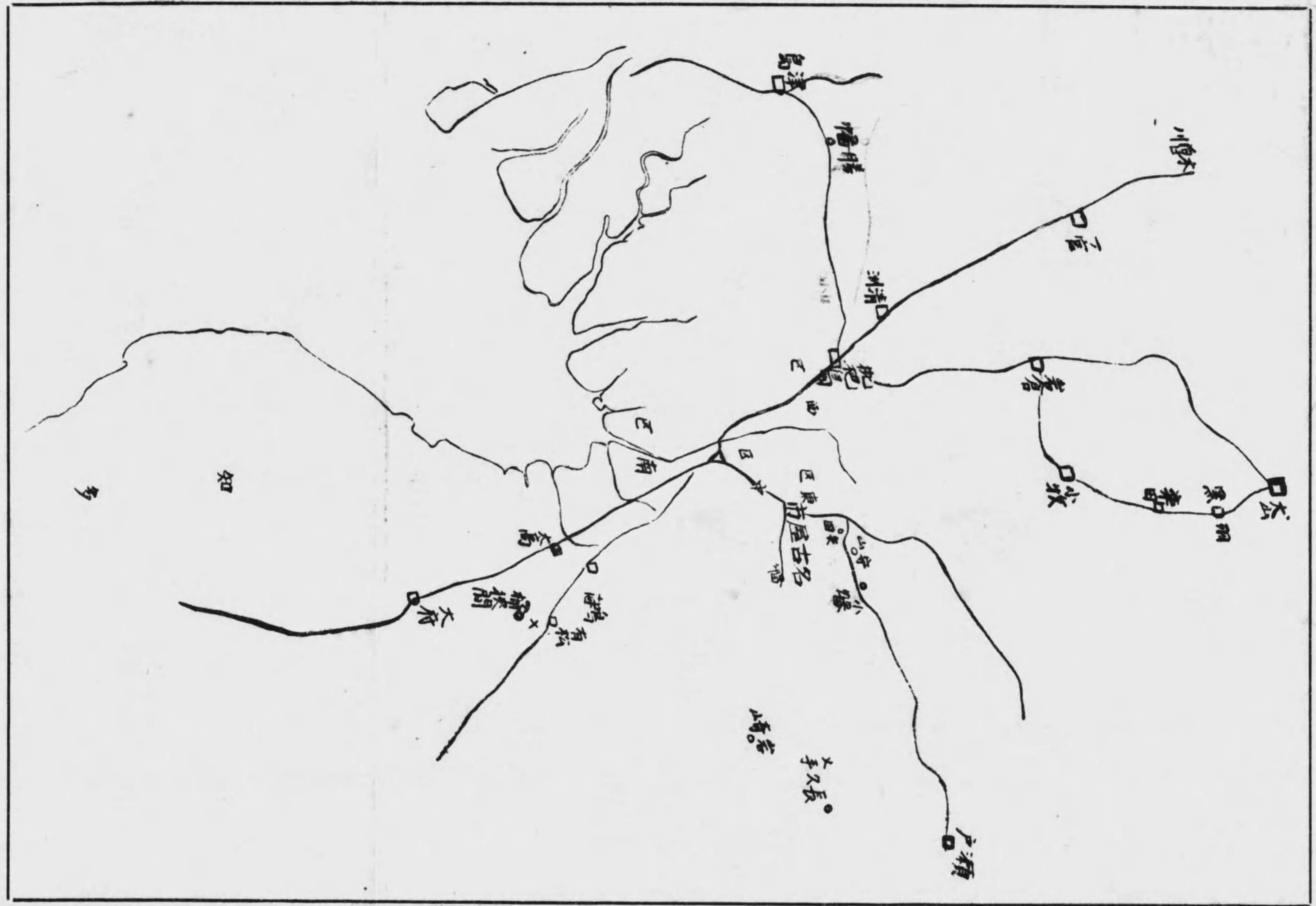
名古屋銀行倶楽部

始



持255
83







名古屋市中心とする史蹟に就いて

岡崎市立図書館長 柴田顯正先生講演

源頼朝誕生地



餘り澤山ございまして、詳しく申し上げ得ないかも知れません。又餘り古い話はごめいと思ひますので、源頼朝の頃から申し上げたいと思ふのであります。

頼朝の親は源義朝でありまして、其義朝の夫人といふのが熱田の大宮司の藤原季範の娘であります。つまり頼朝のお母さんであります。頼朝は今の熱田の旗屋町と申しますが、其處の誓願寺といふお寺の境内で生まれたといふことになつてをります。藤原の季範といふ人は大分三河方面にも關係がありまして、當時『額田冠者』と呼ばれた人で



あります。今の岡崎——其頃は矢作と申しましたが、今の岡崎邊に屋敷を持つてをつた
こどもありまして、寶飯郡の星野、行明など云ふ所とも關係のある人であります。この
季範の家は尾張の目代といひまして、尾張守の代りになつて尾張一圓の政治をする家柄
であります。殊に季範の親の季兼といふ人が大層器量人であつたために、尾張の大宮司
の娘で松の御前といつた人を夫人として、其間に出來たのが季範であります。季範が又
親に劣らぬ器量人でありまして、これが頼朝のお母さんの父に當る譯であります。
さういふ關係で頼朝が平治の亂に敗れて捕はれ、殺されようとした時に、叔母に當る
ところの池禪尼（清盛の繼母に當る人）といふ人が命乞ひをしたので、危ふく助かり伊
豆の蛭ヶ小島へ流されたのであります。それから例の牛若丸——源義經が京都を出て陸
奥の藤原秀衡を頼つて行かうとした其途中に、季範の屋敷に立寄りまして、其處で元服
してそれで始めて『源九郎義經』と名乗つたのであります。とに角季範といふ人は源氏
とは大變な縁故を持つて居る人であります。

野間の大御堂寺

野間の大御堂寺は知多郡の常滑の先方にありまして、一寸名古屋とは離れてをります
が、頼朝の父の義朝と大變關係があるのであります。これは大分古いお寺でありまし
て、行基菩薩が彼處に寄つて開いたといつてをりますけれども、その前に既に天武天皇
の御時に出來てをつたといふことであります。又弘法大師も諸國を修行する途中に彼處
に立寄つて、大護摩を修したといふ話が残つてをります。今は義朝の墓がありますが、こ
れは御承知の通り、平治の亂に義朝の軍が敗れまして、京都にゐられなくなつたので、
源氏は元來關東が根據地でありましたから、關東へ遁げる積りで、この尾張へ入つて來
たのであります。初めは妻の親に當る藤原季範の所へ立寄らうと思つたのですが、併し
熱田は交通の要衝で随分人目の多い所でありますから、熱田へは寄らずに野間に參つた
のであります。さうして野間の莊司の長田忠致の家に立寄つた譯であります。これはナ

ぜかと申しますと、自分の家來の鎌田政家といふ者の妻の親が長田であつて、其關係から立寄つたのであります。家來の妻の親であるから無論害をしないだらう、頼りになるだらうと思つたのです。尤も長田忠致も初めは非常に歡待した。ところが平家の方からだん／＼と義朝を捕へたものには尾張一ヶ國を呉れるとか、或ひは美濃を與へるとかいつて來たために、遂に慾に目が眩んで義朝を殺すやうになつたのであります。平治二年の正月三日のことでありますが、これは長田が義朝が關東に行かうといふのを、セメて正月迄御逗留願ひたいといつて無理に留めて置いたのですが、正月三日に義朝が浴室へ入つた、湯から出て『浴衣を持つて來い』といつたが容易に浴衣を持つて來ない、そこでお供の金王丸といふ男が浴衣を取りに行つた、其隙に豫ねて長田からいひつけられてゐた力士が三人浴室を襲ふて義朝を殺してしまつたのであります。その時義朝が『セメて木太刀でもあつたら……』と大變口惜しがつたといふことであります。今、野間の大御堂の義朝の墓前に木太刀が澤山納められてゐるのは、今申したやうな譯で、後で

人が供養のために納めたものであります。

義朝が浴室で殺されると同時に、鎌田政家もやはり殺され政家の妻も亦咽喉を突いて自殺してしまつた。つまり主従二人と政家の妻とが長田忠致のために野間で殺されたのであります。後に建久元年頼朝が將軍になつて京都に上つて行く途中、大御堂寺へお詣りして義朝の菩提を弔ひ墓を立てました。さうして長田忠致と其子の景致の二人を縛つて義朝の墓の前で磔刑にしたのであります。此處には政家夫婦の墓もございませう。それから織田信孝、即ち信長の三番目の子で三七信孝と呼ばれた人の墓もあります。これは豊臣秀吉と戦つて岐阜の城に籠つたのですが、軍が敗れて野間へ逃げて來て安養院といふ所で切腹したのであります。信孝は死ぬ時に『昔より主をうらみの野間なれば報ひを知れや羽柴筑前』といふ歌を詠んだといふことであります。此歌には二三相違したのがあります。今小さな五輪の塔がございませう。

長母寺

六

次は長母寺——これは東區の矢田町に在るお寺であります。これは少し時代が下つて参りました、承久の役のあつた時代になります。これは御承知の如く後鳥羽上皇と順徳上皇とが北條氏の専横を御憎しみになつて承久三年北條義時追討の院宣をお出しになつたのですが、それに應じて起つたのが山田二郎重忠であります。重忠は尾張の山田の莊（今の東區山田町）の人ですが、重忠の家柄は尾張の源氏といつてをる鎮守府將軍源滿政の末裔であります。これは三河の足助二郎重範も同じ家筋であります。一方は尾張に一方は三河に榮えたのである。山田重忠は足助重範よりも前で承久の役に宮方の軍として忠勤を抽んでたのであります。北條義時は上皇が北條氏追討の院宣をお出しになつたと聞くや、自分の子の泰時を總大將として京都へ攻め上らしたのであります。その時山田重忠は北條氏の軍を美濃の墨股といふ所で防いだのですが、軍が敗れて今度は杭瀬川で防

いだ、而もその時は残る兵は九十何人しかなかつた、重忠は弓の達人で北條の兵をさん／＼惱ましたのであります。名にし負ふ關東の大軍であるから遂に敵することが出来ず、美濃から京都へ退いた上、延暦寺の僧徒二千を率ゐて瀬田の渡を固めてをつたのであります。瀬田の方へ向つたのが北條時房で、泰時は宇治の方へ向つたのであります。ところが宇治の官軍の守りが敗れたために泰時の軍勢は雪崩を打つて京都へ侵入して來ました。それで重忠は瀬田を守つてをつても背後を衝かれるといふ有様で、遂に瀬田の守りも潰えてしまひ、重忠は嵯峨へ逃げたのですが、此處で賊軍に圍まれて遂に腹を切つたのであります。

この重忠が自分のお母さんの爲めに治承三年に建てたのが長母寺であります。長母寺は後弘長三年に有名な無住一圓國師といふ人が住職となり臨濟宗と改めて盛んなお寺にしたのですが、この無住といふ人は『沙石集』といふ可なり方々に擴がつてゐる名高い本を著はしてをります。又萬歳なども無住が佛の道に入るような言葉を交へて作り、そ

七

れを萬歳に舞はしたといふ話もあつて、無住國師といふ人は中々勝れたエライ人であり
ます。

織田氏 (附、岩倉城・清洲城・勝幡城)

次に織田氏のことを申し上げます。織田氏は尾張と越前の守護職をしてゐた斯波しば氏の
家臣であります。守護職といふのは、始め頼朝が置いた役であつて、これは武權と警察
權とを兼ねてをるのであります。これは足利氏の時もズーツと置いてあつたのです。こ
の尾張と越前の守護職の斯波氏の先祖といふのは足利氏の一族で越前で新田義貞と戦つ
て、義貞を燈明寺畷で討死させた足利尾張守高經といふ人でありまして、此人が功に依
つて北朝から尾張と越前とを貰つたのであります。その後が斯波氏と稱した、右兵衛督
義重の時に始めて斯波といつたのであります。

これが尾張と越前の守護職となり、越前の方は朝倉氏といふ守護代を置き、それから
尾張の方は織田氏が守護代になつてをつたのであります。この織田氏には二軒あつて一
は織田伊勢守といひ、一は織田大和守といつてをりました。さうして伊勢守といふ人は
岩倉にをつて尾張の上四郡かみを治め、もう一ツの大和守の方は清洲にをつて、これもやは
り尾張の下四郡しもを治めてをつたのであります。岩倉城を最初築いた人は伊勢守の先祖で
織田敏廣といふ人であります。この岩倉の城は後に信長のために奪られて廢城となつて
しまひました。清洲の城は斯波義重が築いたのであつて、その年代は應永ともいひ、或
は永和年間であるといつてをりますが、とに角南北朝の末、足利時代の初め頃でありま
す。織田大和守の方の先祖は敏廣の弟に當る敏定といふ人であります。この敏定が斯波
氏を助けて清洲にをりましたが、斯波氏は足利將軍の代りに政治をとる管領といふ役を
勤めてをつたために、大部分は京都にをつたので大和守が主として政治をとつてをつた
譯であります。ところが敏定の下に清洲の三奉行といふ家老と稱するものがをつたので
あります。其三奉行の一人に織田彈正忠信定といふ人がをりまして、これが勝幡城を

築いてをつたのであります。勝幡城は今の海部郡美和村と中島郡平和村に跨がつてをるといふことであります。この信定の子が信秀で後に備後守と稱した人であり、又信秀の子が即ち信長であります。つまり信長の家は斯波氏の家老の織田大和守のその又家老であります。家柄としては大して立派なことはない。斯波氏からいつても陪臣である。況んや將軍からいへば幾つも下の又下の方の家であります。勝幡城は信定の次ぎに信秀も住んでをりまして、全く織田氏發祥の地であります。

それで丁度信秀の時分には主人に當る大和守の家よりも、信秀の方が強くなつて、主として信秀が斯波氏を助けて政治をとつたのでありまして、つまり信秀の時になつて本家にとつて代つたといふ譯であります。當時斯波家にはどういふ人がをつたかといふと斯波義達といふ人がをつたのであります。その頃三河の幡豆郡の臥蝶ふせに大河内備中守といふのがをつた。後に『智恵伊豆』といはれた松平伊豆守信綱はこの大河内家なのであります。その大河内備中守がだん／＼勢ひを得て遠州へ攻めて行つた。遠州は當時今川

氏の勢力範圍でありましたが大河内は曳馬野城(今の濱松)に籠つて遠州を經營しようとしたのであります。さうして斯波義達に兵を出して應援して呉れと頼みました。そこで止せば好いのに斯波義達は自ら兵を率ゐて曳馬野城に入り大河内と共に彼の近邊を夷げようとしたのであります。當時駿府(今の静岡)にをつたのは今川修理大夫義元親で、即ち義元の親であります。これが駿府から兵を出して永正十一年に曳馬野城を攻め圍んだので大河内一族は悉々討死しました。斯波義達は濱松在のお寺に入つて坊さんになつてしまつたので、氏親も髪をふろした義達を殺すに忍びず、自分の季の子である左馬介氏豊に命じて義達を尾張に送り還したのであります。清洲に歸つた義達は最早自分は坊さんになつてをるので隠居をして、其後を繼いたのが義統であります。

那古野城(附、古渡城・末森城)

ところが義達を清洲に送つて來た今川氏豊は駿河の方へは歸らずに那古野に城を構へ

た。さうして柳の丸といつてをつた。今の名古屋城の中であります。つまり今川氏の勢力が尾張へ及んで来た譯であります。そこで勝幡城にをつた織田信秀が今川が尾張へ入つて来るのは怪しからぬ、ごうかして追拂つてやりたいといふので、信秀は伴つて氏豊と仲よくした。氏豊は當時流行した連歌を好んだので信秀も連歌を學んで、連歌の會を氏豊が開く度に信秀は那古野城へよく出入したのでありますが、或時やはり連歌の會があつて信秀がやつて来たところ、那古野城で急に信秀は病氣で寝ついてしまつた。そこで勝幡の城からは信秀の家來が病氣の看護のためだといつて續々那古野城へ入つて来るさうして油斷を見すまして、信秀の看護のためといつて入つて来た武士が城の中で騒動を始めたのであります。豫ねて牒し合せてをつたので織田氏の兵が城外に澤山集まつて来て、外からも應ずることまで到頭氏豊は駿河へも逃げられず、京都へ逃げたのであります。ここで信秀は勝幡城から出て那古野城へ遷つたのであります。これが天文元年の三月十一日の事であります。さうして天文三年五月二十七日に那古野城で信長を生んだの

であります。信長は幼名を吉法師といつてをつた。其の頃は妙な名を子供につけたもので、法師は坊とかいふやうな意味かと思ひます。

信長はそれからズーツと那古野城に住んだのでありますが、信秀は古渡城に天文四年（一説には天文三年、或は天文十一年ともいふ）遷つたのであります。今の東本願寺別院の在る所がさうであります。次いで天文十七年には末森城を築いて遷つたのですが、これは東區田代町の城山がさうであります。末森城の北に當る所に守山の城があります。此處には信秀の弟の孫三郎信光といふ人がをりました。これは主として三河に對する警備のためであります。勿論末森城も三河に對する警備として築いたものです。當時三河には家康の親の廣忠がをりました。天文十一年には有名な小豆坂の合戦といふのがありますが、これは今の岡崎の停車場の東北に當る所でありまして、此處で信秀が今川の軍を破つたのであります。その頃は今川義元の勢力がだん／＼三河に及んで来たので、其防禦の意味で城を築いた譯であります。信秀は天文二十年末森城で亡くなりまし

たが、その以前古渡城にゐる時に信長が元服しました。丁度十三の時吉法師を改めて三郎信長といひ、後には上總介と申したのであります。天文二十年三月三日に信秀が末森城で死んだ後を信長が継ぎました。

政 秀 寺

ここで一寸政秀寺のことを申し上げます。信長といふ人は子供の時は可なりヤンチャものであつたやうです。武藝は何でもよく出来た。弓も射るし鐵砲も打つ、馬に乗ること、水泳をやる、何でも一通り習つて熱心にやつたのですが、其他のことは一向構はない、信秀の死後お葬式を萬松寺で行つた。萬松寺は信秀が建てたお寺です。そこでお葬式をした時に信長が髪を茶筌ちやせうに結つて髻もみぢりを紫の紐で結び、さうして大きな刀などを指して焼香の盤の前へ行つてお香を掴んで香爐の中へ擲なげつけたといふことであります。又道を歩く時に人の肩につかまつて往來を瓜や餅を食ひ乍ら歩いた、さういふことをやつ

てをつたのであります。それで傳役もちやくの平手中務政秀が大層悲しんで屢次諫めたけれども一向聴かない、幾度諫めても聴き容れなかつたので遂に切腹して諫めたのであります。信長はその話を聞くと直ぐに裸馬に乗つて駈けつけた。まだ政秀の呼吸の止まらない間に駈けつけて非常に嘆き悲しんで、今迄の行ひの悪いことを詫びたのであります。政秀はその時信長の手を握つてどうかエライ人になつて下さいといつて頼んだのであります。信長は後に西春日井郡小木村に政秀の菩提を弔ふために政秀寺といふお寺を建てました。その政秀寺の開山が澤彦和尚であります。これは政秀と大變親しかつたものですから、澤彦を開山として政秀寺を建てた譯であります。政秀寺は後年小木から清洲に移り、慶長十七年になつて今の中區矢場町に移つて來たのであります。政秀が切腹したのは天文二十二年閏正月十三日で、信長は當時二十歳でありました。政秀の切腹に依つて信長は翻然と前非を悔み、臈ろうがて立派になつたのであります。

桶狭間古戦場（附、鳴海城・大高城）

一六

當時信長は古渡城にをりましたが、政秀の死んだ翌年天文二十二年に清洲城にゐた斯波義統は織田彦五郎信友のために弑されたので信長は直ちに天文二十三年四月に彦五郎信友を清洲に攻めて遂にこれを殺し自分が清洲に入ったのであります。さて桶狭間の合戦でありますが、當時駿府にをつた今川治部大輔義元は大分大きな志を抱いてをりました。只今川家は氏親の夫人といふのが京都のお公卿さまの中御門大納言の宣胤の女である關係から京都の公卿が大分駿府へ集まつて来てをつたのであります。當時應仁の亂で皇室の御式微は申すも畏いほどでありまして、公卿の方々も生活に困るといふ有様で可なり地方へ流れて来たのであります。長州の山口なども大内義隆がゐた頃は京都から公卿が澤山行つてをつたのであります。丁度駿府もそれと同様に可なり公卿が集まつて来たので、自然義元も公卿の感化を受けて京都風になり、髪も總髪といつて月代さふやまを剃らな

い、或は眉を剃つてその跡を繪どつたり、齒なども鐵漿かぬを塗つたりしてをつたのであります。義元がさういふ風であつたために其子の氏眞も武藝はソツチのけにして、茶の湯とか、蹴鞠とかいふやうなことはかりやつてをつたので、遂には武田信玄のために駿府も奪られてしまつたやうな譯であります。

さういふ風に大分京都風にカブレてをつたのですが、只一人大原雪齋といふ禪宗の坊さんがあつた。此人は大變文藝に長け且つ立派な人物で駿府の北に在る臨濟寺といふ寺の住職であります。家康が幼い時、今川家に人質となつてをつた時、此人に就いていろいろ文學を學んだのであります。當時有名な傑僧であります。で義元も此雪齋を非常に頼りにしてをり大抵の仕事は皆この人がやつてをつたのですが、惜しいことには弘治元年——桶狭間の合戦の六年前の閏十月十日に六十歳で病死したのであります。これは義元にとつては大打撃であつて全く名參謀長を亡くした譯であります。それ以來今川の武力もだん／＼衰へて參つた、若し雪齋が健在ならば桶狭間合戦に義元があんなに脆

一七

く敗けはしなかつたであらうと思はれる、併し雪齋は死んでも暫らくはまだ餘勢があつた、三河は義元の勢力範圍であつたし、尾張も愛知郡などは今川の勢力に靡いてをつたのであります。鳴海の城に山口左馬助致繼といふ人がをりましたが、初めは織田の家來でしたが、信秀が死ぬと信長が放縱不羈で恰かも今日の不良少年のやうであつたために織田氏を見限つてしまつて今川氏に屬し笠寺とか中村とかいふ所に城を構へ、笠寺の城には今川氏の將士を引張つて來て入れ自分は中村の城にをり鳴海の城には自分の子の教吉を入れたのであります。さうして愛知郡の沓掛の城を奪ふ、知多郡の大高の城を攻めて取る、さうして大高の城には鶴殿長照といふ今川氏の身内を入れたのであります。義元が輕卒なことをせず慎重にやつてをつたら信長もどうなつたか分からぬのであります。

當時の武將としては大抵京都へ上りまして京都で將軍を挾んで天下に號令しようといふことを皆理想としてをりました。義元も京都には縁故もあるので早く京都へ上つて將軍を擁して天下に號令しようと思つたのであります。かくて愈々永祿三年五月駿府を發し京都へ上らうと企てたのであります。義元が京都へ攻め上るといふ風聞は前からあつたので流石の信長も打捨て、置けなくなつた。そこで鳴海の城に對して丹下、善照寺、中島といふ三ツの寨を構へたのであります。鳴海の城は今野球場に行く途中になつてをりますが、今でも大きな板が残つてをります。高めになつてゐるからよく判かります。それから大高の城に對しては鷺津、丸根といふ二ツの寨を構へ此處で兵糧の道を斷たうと計畫しました。さうして丸根の城には佐久間大學盛重といふ男を入れ、鷺津の城には自分の一族である織田玄蕃頭秀敏及び飯尾近江守定宗、その子の隱岐守信宗の三人を入れて置きました。又善照寺の城には佐久間右衛門信盛を入れ、丹下の城には水野帶刀を入れ、中島の城には梶川平左衛門を入れて置いたのであります。十分準備をしてをつた譯です。ところが義元の軍はその數四萬と號したのであります。勿論四萬はなかつたと思ひますが三河、遠江、駿河の兵を合せて二萬はあつたでせう。その大兵を率ゐてやつ

て来た、永祿三年五月十二日に駿府を立ち五月十七日には三河の池鯉鮒に本陣を構へたのであります。それから十八日には沓掛の城に入り十九日には桶狭間、有松の東方五六丁の所に陣を張つたのであります。

一方信長は清洲にをりましたが、だん／＼今川の軍が攻めて来るといふ話を聞いても一向戦さの用意をしない、家老共が大變心配して『大將の智慧の鏡も曇つた』といつて半ば嘲けり、半ば心痛したのであります。それでも信長は一向構はない、十九日の曉に大高の城に對して備へた鷺津、丸根の寨に向つて今川の先鋒朝比奈備中守泰能が攻めかゝつた、丸根の寨には松平藏人元康（後の家康）が攻めかゝつた、當時元康は十九歳でありました。家康は信長から見ると丁度九ツの弟に當ります。天文といふ年は尾張三河の三人の英雄が生まれた年であります。即ち信長が天文三年五月二十七日、二年置いて天文五年の正月の元日に秀吉が生まれ、天文十一年の十二月廿六日に家康が生まれたのであります。さうして天下統一の仕事も同じやうに先づ信長が一番先で、それから秀

吉、それから家康といふ順になつてをります。話は戻りますが、家康の松平藏人元康は十九歳で丸根の城を攻めたので丸根をつた佐久間大學及び鷺津をつた織田玄蕃允が清洲に早馬を飛ばして急を告げたのですが、警報に接した信長は一向平氣でをつたのであります。

愈々十九日の夜明けに清洲を出るといふことになりましたが、その出陣の前に信長は何時も好む小敦盛の舞を舞つた、これは信長の人生觀を現はすもので一寸面白いと思ひます。『人生五十年、化轉けてんのうちを比ぶれば夢ゆめ幻まぼろしの如くなり、一度生を享け滅せぬもののあるべきや』と繰返し／＼三度も舞つたといふのであります。さうして法螺貝を吹けとか、具足を寄越せとかいつて、具足を着け乍ら飯を喫べた、清洲城を飛び出した時は随ふものは纔かに五騎、主従六騎で清洲を出て熱田神宮にお詣りして祝勝の願文を奉つた、さうして源太夫の宮の前に立つて東の空を望むと黒煙が盛んに揚がつてゐる、鷺津、丸根の寨が落城したためですが、此時鷺津の飯尾父子、丸根の佐久間大學は共に

討死したのであります。その頃漸く千人餘の兵が集まつた、これから海手を行くと早いけれども、丁度滿潮の時であつたので山手の方から進むことになつたのであります。さうして最初に入つたのが丹下の城であつて、それから善照寺に移つた、信長が丹下の城に来る途中で飯尾父子及び佐久間大學が討死したといふ通知を受けたのであります。その時信長は銀の玉の大きな珠數を取出して肩にかけ『自分よりお前たちは先に死んだが、そのうちには俺も後から行くぞ』といつて駈けつけたといふことであります。信長が丹下から善照寺に移る時、それを見て佐々隼人正、千秋四郎、前田又左衛門、岩室長門守などが今川の兵を牽制するために鳴海の城に向つて攻めかゝつたのであります。鳴海の城を守つてゐたのは岡部五郎兵衛元信といふ今川家の勇將であります。この戦ひで千秋四郎、佐々隼人正、岩室長門守が討死してしまつた。その首級が鳴海から義元の本陣の桶狭間へ届いた、すると義元は首實檢をして『自分の鋒先には天魔破句も敵し難し』と大喜びして謠曲を三番謳つたといふことであります。自分の武力には鬼神も及ば

ないといつて大いに意氣驕つてツイ備へを怠つた譯であります。義元は戦勝に酔ふて大いに油断してゐる、信長の兵が善照寺の城から中島の城へ入つて来た頃、折しも五月十九日で丁度梅雨の時です。大雷雨があつたが善照寺の寨へ入つて勢揃ひをして見ると約三千の兵であつたといひます。そこで一千だけ残して鳴海へかゝり、二千の兵を率ゐて中島の寨へ山手を廻つて行つたのであります。無論義元の本陣を探索してをつたのであります。間諜を放つて探索したら、今申し上げた通り義元は首實檢をして油断してゐる、なほ又近邊から献上した酒や肴を食つたり、飲んだりして一向警戒してゐない、そこで信長の兵は一齊に太子ヶ根から攻めて行つた、義元の方では始めは味方同士で喧嘩したのぢやないかと思つてゐるところへ信長の二千の決死の兵が勢ひ鋭く攻め寄せたのであります。

そこで義元の本陣はだん／＼南の方へ下がつたのであります。今日石碑の立つてゐるところは、あれは義元の最後の場所であります。五百騎ばかりで義元を真中にしてだん

く引揚げて行つたのですが、信長の兵が餘り急に攻めかゝつて來たものですから、義元を守つてゐた旗本の將士が返り合せくして大半は討死したのであります。此戦ひでは今川方は名有る將士が五百人も討死してをりますから、雜兵も五千人以上死んでをります。それほごヒドクやられた。さうして始め道の傍らに塗駕ぬりかごが捨てられてあるのを見て、信長の兵は此處が本陣だといふことが分かつたので、先方へ遁たかげて行くのが義元に違ひないと追かけたのであります。眞先に義元を認めたのは服部小平太で最初に義元に槍をつけた。すると義元は其槍を斬つて小平太の膝頭まで傷けた。そこへ毛利新助といふ勇士がやつて來て小平太に助勢して義元に斬つてかゝつた、さうして義元と新助とが組打をして義元に新助は小指を噛み切られたのですが遂に義元の首を刎ねてしまつたのであります。義元が討死すると共に今川の軍勢は全く土崩瓦解したのであります。實にミジメな敗北を遂げた、信長は大勝利を獲て義元的首級を見ると、それを馬の首につけて直ぐさま清洲に引返したのであります。今川勢の中では只一ツ鳴海の城にゐた岡部元

信だけが頑強に抵抗して中々開城しない、さうして義元的首級を貰つて始めて開城したのであります。岡崎の城にも今川の將士がをつたのですが、大將の義元が討死したといふことを聞くと皆駿河の方へ逃げてしまつた、今川氏の敗北は徹底的であつた。これが有名な桶狭間合戦の大略であります。

秀吉誕生地

これから秀吉の誕生地の話に移ります。秀吉は天文五年正月元日に御承知の尾張の中村といふ所で生まれました。併しこれには一寸異説もあるのであります。今のところさういふことになつてをります。丁度申やの歳であつた、さうして幼名を日吉丸といつたといふのですが、これは一寸疑問であります。秀吉のお母さんは御器所の人ですが、後に大政所といはれた人で秀吉が朝鮮征伐のために軍を率ゐて肥前の名護屋に居る間に死なれたのであります。このお母さんが氏神の日吉神社にお詣りして安産をお禱りして生

まれたので幼名を日吉丸といつたといふのですが、どうもこれは疑問であります。又秀吉のことを猿といひますが、あれは子供の時の名が猿といつたのぢやないかと思ひます。小猿といつたと申しますが、それが本當ぢやないかと思ふ、容貌が猿に似てをつたといひますけれど、それほど猿に似てをらぬようであります。申の歳に生まれたから猿といふ名をつけたのだらうと思ふのであります。當時はさういふ名をよくつけたのでありまして、信長の子供でも妙な名前をついたのがあります。信長は男の子が十一人、女の子が十二人ありましたが一番長男の本能寺の變の時に討死した信忠は幼名を奇妙といふのであります。それから二番目の子の信雄は幼名を茶筌といつてをります。三番目の子の信孝が幼名を三七といひますが、其他の子も皆妙な名前——酌、人、縁、大洞、小洞、長好——をつけてをります。ですから秀吉の幼名の小猿といふのも本當ぢやないかと考へられます。秀吉のお父さんは信長の鐵砲足輕で木下彌右衛門といふ人でありましたが、秀吉が六ツの時にお父さんが死んだ、さうして後の繼父が筑阿彌といふ信長の同

朋（お茶坊主）であります。どうも秀吉はこの繼父と合はなかつたやうです。太閤記を見ますと、方々へ奉公に出されて最後に紺屋へやられて子供の守をさせられた、すると子供を井戸の井桁に縛りつけて逃げてしまつたといふ話がありますが事實かどうか分りません。又岡崎の矢作の橋の上で寝てゐたら蜂須賀小六のために頭を蹴られたので、小六の槍を掴まへて大いに啖呵を切つたといふことをいひますが、これも傳説としては面白と思ひますが事實かどうかは分かりません。

秀吉が愈々自分の故郷の中村を出たのは實際は十六の時であります。十六の時に親の實父の彌右衛門が遺して置いた永樂錢一貫文を持出して家を出た、これは竊んだ譯でなく親の遺身かたみとして貰つて居つたものらしい。こに角錢千文を持出して清洲に出て、それから縫針を買ひ込んで其針を商内乍らだん／＼流浪して遂に遠州の濱松へ參つたのであります。それから濱松の松下嘉兵衛之綱のところ仕へて三年間ばかり實に眞面目に働らいたのであります。非常によく仕へたものですから松下嘉兵衛も大層目をかけて

をりましたが、朋輩の嫉みを受けて、居ることが出来ず十八歳の時尾張の中村に歸つたのであります。さうして信長の草履取になつたのであります。さうして皆さんも御承知の通り、信長の草履を懐ろに入れて暖めてをつたり、或は麻の番を命せられて馬に蚊いぶしをしたりいろく忠實に仕へたといふ説があるのであります。さうして永祿五年五月美濃の齋藤氏に對して墨股に樂を構へて、それ以來始めて一方の旗頭になつた譯であります。又信長が永祿十一年の九月京都へ上洛するにも秀吉は付いて行つた譯であります。この時、秀吉は江州の六角義賢の持つて居つた箕作山の城を攻め落したのですが、その功勞を録せられたのが抑もの始まりであつて、當時はまだ木下藤吉郎といつてをたのであります。その頃北江州には淺井がをり越前には朝倉がをりました。この朝倉はやはり織田と同じく斯波氏の家老であつたのですが、遂には信長の敵になつて、到頭天正元年の八月に朝倉も淺井も皆信長のために亡ばされたのであります。その時も大いに手柄を立てたので秀吉は淺井の舊領地である北江州を大分貰つて長濱に城を構へたので

あります。さうして此時初めて羽柴筑前守といつたのであります。それから中國攻めに參りましたのが天正五年で秀吉が四十二の時であります。中國の毛利氏を敵として天正五年から十年まで足かけ六年間に亘つてをりますが、天正十年六月二日に本能寺の變が起つて信長が明智光秀のために殺されました。信長は四十九で亡くなつたのであります。急を聞いた秀吉は當時備中の高松の城を水攻めにしてをつた時であります。丁度六月三日の夜であつた。それから毛利氏と和睦して直ちに引返して六月十三日の山崎合戦で明智を破つたのであります。光秀は戦ひに敗けて逃げる途中百姓一揆が起つて到頭殺された譯であります。俗に『明智の三日天下』といひますが、六月の二日から十三日迄です。實は十一日の天下であります。

この山崎合戦以來、秀吉の勢力がメキ／＼と大きくなりまして、翌年の天正十一年の四月には例の賤ヶ嶽の戦ひ——七本槍で名高い賤ヶ嶽の合戦で柴田方の佐久間玄蕃盛政が最初秀吉の軍と戦つて勝つた、秀吉方が敗けたといふ報が當時大垣の城にゐる秀吉の

許へ四月の二十日に來ると同時に大垣の城を飛び出したのであります。使ひのものに『佐久間玄蕃は引取つたか』と聞くと『まだもとの場にをります』といふので、秀吉は腰の短刀を抜いて二度三度額を叩き乍ら『八幡!! 戦ひは勝つたぞ』といつて直ぐさま飛び出したといふことであります。さうして道々百姓に『後から澤山の兵隊が來るから兵糧の用意を頼む』といつて一騎駆けで行つたのであります。その後からくく秀吉の軍が續いて駆けて來て二十一日の夜明けに佐久間盛政が勝つて油斷してゐる所を不意打ちしたのであります。今度は佐久間が滅茶々にやられ、延いて柴田勝家の軍勢は總敗北となつて二十四日には勝家の居城である北ノ莊(今の福井)を攻め取つたのであります。實に秀吉のやり方は疾風迅雷の勢ひであります。これは秀吉でなければ出來ない早業であります。勝家が北ノ莊の城で切腹して城が落ちると同時に、勝家と呼應して秀吉を討たうとしてゐた信長の三男の三七信孝も自分の居つた岐阜城から遁がれて野間に落ちてさうして此處で腹を切つたのであります。これが五月二日のことであります。

小 牧 城 (附、犬山城)

柴田勝家が亡びた後は信長の子で、とに角頭を擽げてゐるのは信雄だけであります。秀吉はこの信雄に對して、そろく壓迫を加へ始めたのであります。信雄は當時伊勢の長島の城にをりまして、尾張と北伊勢の五郡を領分としてをりました。秀吉から壓迫を受けたので徳川家康に助けを乞ふたのであります。家康としては洵に好い名目を獲た譯です。とに角、秀吉は主筋に當る信雄を壓迫するといふのですから、家康が信雄を助けるといふことは即ち義のために秀吉を討つといふことになる譯で洵に立派な名分が立つので、家康としては喜んで助けたのであります。

天正十二年の三月に信雄は自分の家老三人を殺した、これは秀吉方に内通したといふのであります。事實かどうか分からないのです。さうして秀吉と斷つたのであります。今日の言葉でいへば宣戦布告であります。これが三月六日のことで、その十三日に

は家康が清洲に入つて来た、さうして清洲で信雄と相談した。十三日の夜犬山城を秀吉方の池田勝入齋信輝とその子の紀伊守之助とが奪ひ取つたのであります。秀吉が尾張に入つて来たのが三月二十七日で犬山城へ入つた、さうして愈々本格的の軍になつたのであります。家康の方は本陣を小牧山に置いた、丁度十四日の日です。秀吉は犬山城から樂田へ出て本陣を構へた。一方は小牧、一方は樂田を本陣として、各々寨を構へて相手を睨んでゐる、一寸戦ひの仕かけやうがない、下手にしかければ、しかけた方が敗けるに決まつてゐる、双方とも大いに自重して中々手を出さぬといふ有様であつたのであります。

長久手古戰場 (附、小幡城・岩崎城)

これを見た池田勝入は家康の兵は今悉々尾張に入つてゐる、家康の居城岡崎は空になつてをるから、此處で竊かに間道を通つて岡崎の城を襲ふたら、家康は驚いて必ず

軍を斑へすに違ひない、さうすれば後へ残るのは信雄だけであるから、これは問題でない、そこでどうかして家康を信雄から離れさせたいといふので、四月四日に池田信輝は秀吉にこのことを申し出たのであります。ところが秀吉は中々聽かない、すると四月五日に重ねて秀吉に頼んだ、そこで秀吉も「それなら自重して、輕卒なことをしないでやれ」といつて許したのであります。信輝は秀吉の甥に當る三好孫七郎秀次を總大將として傅り立て、それに堀久太郎秀政を軍監として、自分と自分の子の紀伊守之助、それに森武藏守長可——これは信輝の婿です——これだけ五人の手で以て三河を衝かうとした、第一軍は信輝父子で第二軍は森長可、第三軍が秀政、最後の第四軍が秀次といふ備へで六日の夜樂田を立つたのであります。總勢二萬ばかりであつたといふことです。七日の夜には庄内川の岸に来て此處で夜營をしたのであります。ところが大變拙かつたのは——その理由はよく分からないのですが、想像しますに多分これは兵糧の用意が十分でなかつたからだらうと思ひます。二萬の兵を引張つて行くのですから途中岡崎まで兵糧

を掠めてやつて行くといふことは出来ない、どうしても兵糧を持つて行かなければならぬ譯ですから此處で夜營をした、さうして八日の夜立つたのであります。つまり一日を空しく過ごした、すると此處等の村のものが小牧へ通知をしたのです。どうせ二萬も兵を連れて行くのですから何れは分かるに違いない、併し先方へ行つてから分かれば好かつたのに庄内川の沿岸で悠々と夜營してゐたものですから、直ぐ家康方へ判かつてしまつた、小牧では家康がこれを知つて『これは屹度秀吉が三河へ入り込むに違ひない』と考へつたのは無理もない譯です。さて信輝の軍が庄内川を渡つたのは八日の夜であります。それから此處に白山林といふ所がありますが、茲に秀次の軍勢が八日の夜から九日の夜明けにかけて休んだのであります。さうして朝食を攝つたのです。それから此先方に岩崎といふ所があります。茲には丹羽氏次といふのがをつたのですが、氏次は家康の小牧の陣へ來てをりまして、當時は弟の氏重といふ纔かに十六歳の少年でしたが、その氏重が守つてをりました。ところが初めは池田も森も岩崎を攻める積りではなかつたの

ですが、池田の軍勢が岩崎の寨を横に見て通つて行く積りであつたけれども、丹羽氏重が鐵砲を打かけた、その鐵砲が信輝の馬に中つたために信輝が落馬した。信輝は恐ろしく腹を立て、一氣に押し潰せといつて岩崎城を攻撃したのが九日の夜明けのことでありま

す。一方小牧の方では八日の朝、軍を手配りして早々に出發しました。それは水野忠重、その子の勝成、丹羽氏次等の軍で小幡の城へ入つたのであります。小幡の城には家康の家來の本多豊後守廣孝がをつたのですが、猶ほ續々小牧から榑原康政、松平家忠、大須賀康高といふやうな軍勢が二回目に出て最後に八日の夕方に家康が信雄と一緒に小牧を立つたのであります。小牧の城には酒井忠次、本多忠勝、石川數正、菅沼新八郎といふやうな家來を残して行つたのであります。さうして自分の本隊は井伊直政を先鋒として八日の夕方から大急ぎで小幡の城へ入つた、それで九日の夜明けに白山林の秀次の軍を襲つた、秀次の兵が九日の朝、朝飯を食つてゐる所を背後と側面から攻撃されたので一堪

まよりもなく破れて逃げた、それを見て堀秀政が檜ヶ根といふ所に引返して茲に陣を張つて家康の軍勢が秀次を破つた勢ひに乗じて進んで来るのを待ち受けてをつたのであります。さうして家康の軍が進んで来るのを見て一齊に鐵砲を打ちかけたのであります。不意を打たれたため家康の軍がヒドクやられた、その時丁度家康が色ヶ根といふ所から富士ヶ根といふ所へやつて参りました、さうして勝誇つた秀政の軍勢を攻撃し一旦敗けた軍を盛返したのであります。秀政は破られて退いた。

それから信輝は岩崎城が陥落して丹羽氏重、加藤忠景以下三百人ばかりが討死したので、その首實檢をやつてをる所へ家康の軍勢が攻撃して来た、茲に佛ヶ根といふ所と前山といふ所がありますが家康の軍勢が其處迄進んで来たのであります。それで森武藏守長可は岐阜嶽へ引返し、池田勝入齋父子は頭狭間へ引返して此處で兩軍の激戦となつたのであります。今いろ／＼な碑が建つてをるのは茲であります。家康方は盛んに鐵砲を打掛ける、森武藏守長可は『鬼武藏』と呼ばれたくらゐ強勇の大將でしたから家康が鐵

砲を打かけるのも構はずに突撃したため遂に彈丸に中つて討死しました。時に年が二十七であつた。それから信輝も鐵砲でやられて傷を受けたので休んでゐる所へ家康方の永井傳八郎といふ勇士が來合せて遂に首を取つた。信輝は四十九歳であつた。信輝の子の紀伊守之助は親が討死したので一人空しく生きて還られないといふので、これ又奮戦して花々しい討死を遂げたのであります。此白山林と檜ヶ根と富士ヶ根の合戦を『長久手の朝の合戦』といひ、それから佛ヶ根と頭狭間の合戦を『長久手の晝の合戦』といつてをります。

これで小牧の陣の長久手戦は終つた譯ですが、戦ひに勝ちますと、家康は直ぐさま小幡の城へ入つてしまつたのであります。秀吉が池田父子と森長可の討死したことを聞いて大いに怒つて直ぐ軍を出したのですが、其時は既に家康は兵を戢めてしまつた後なので、流石の秀吉も手を空しうした譯であります。そこで秀吉は小幡の城を取り圍んで明朝から攻撃しようとしたのであります。その夜家康は小幡から小牧に還つてしまつた

ため秀吉も亦樂田の本陣に歸つて來ました。その後は兩軍とも自重して動かず、十一月に到つて秀吉と信雄との間に和睦が成立したのであります。さうして又秀吉と家康とも和睦することになつたのであります。これが長久手合戦の概要であります。

まだお話ししたいことがありますが、大變遅くなりましたからこの邊で御免を蒙ります。長い間御静聴下さいまして有難うございます。

(大尾)

(昭和十年六月十四日
於名古屋銀行俱樂部)

昭和十年七月二十六日印刷
昭和十年七月三十一日發行

昭和十年七月二十六日印刷
昭和十年七月三十一日發行

(非賣品)

發行者 名古屋市中區大坂町三丁目四番地 長 戸 備

印刷者 名古屋市中區南大津町二丁目三番地 扶桑社 英 比 貞 造

發行所 名古屋市中區南外堀町六丁目三番地 名古屋銀行俱樂部

終

